第Ⅳ部門　　河川敷の利用特性と要因からみたﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ空間としての整備のあり方に関する研究

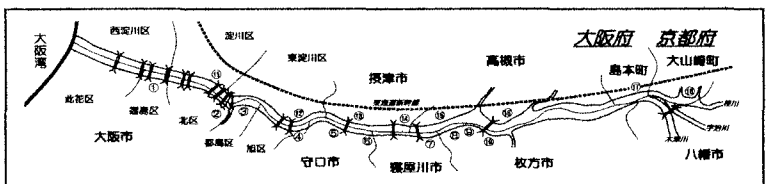
国土交通省近畿地方整備局　正会員　髙田　英和
大阪工業大学大学院工学研究科　学生員○松下　直文
大阪工業大学工学部　正会員　岩崎　義一

1．はじめに

（1）研究の目的と背景：　近年、都市内において「潤い」や「やすらぎ」を感じ、「憩い」や「運動」などといった余暇を過ごせるようなレクリエーション空間を保持するオープンスペースの必要性が高まっている中、都市を流下する河川の高水敷（以下河川敷という。）の整備が重要になっている。河川敷にレクリエーション空間が整備された場合、より多くの市民に積極的活用を促進することにより、その整備効果を高め波及させることが課題と考えられる。

そこで本研究では、淀川河川敷を対象として河川敷の利用特性および河川敷利用に係る地理的条件等の要因を明らかにし、レクリエーション空間としての河川敷整備のあり方について検討することを目的とする。

（2）淀川河川敷の実態：　淀川は、宇治川・桂川・木津川の三川合流部（京都府八幡市）から大阪湾（大阪市）までの延長三十数キロに亙り、河川敷で国営公園事業として進められている。規模計画面積は 962ha、すべてが公園として計画され、わが国では本河川と木曽三川（うち長良川）の２ヶ所で展開されている。本研究においては、レクリエーション空間の役割を果たしている 18 地区を対象とする（図 1-1）。



番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
地区名	海老江	長柄	毛馬・赤川	太子橋・外島	八雲	大日・佐太西	太間・木屋元	出口	三矢	枚方	西中島	豊里	島新西	島新上	三島江	大塚	島本	大山崎
面積(ha)	7.0	2.1	9.3	12.9	3.9	11.7	17.4	6.7	1.9	28.8	6.7	4.4	1.4	11.6	6.3	19.5	3.9	6.5
利用者数(千人)	235.6	15.8	258.4	287.4	105.8	384.4	602.7	18.4	45.8	553.6	186.4	137.5	28.6	198.3	131.8	264.5	70.4	77.6

図 1-1　淀川河川公園の位置図及び属性（平成 11 年度）

2．利用者集計からみた利用特性

淀川河川敷の利用者数構成をみると、利用者数全体の 85%が運動施設以外の芝生広場・休憩広場等を利用している。また、運動施設利用者は全体の 15%でその中でも野球場を最も多く利用している。そこで、全体の 85%を占めている芝生広場・休憩広場等の利用者数を地区別に月別割合をみると、⑤八雲の５月、⑩枚方の８月の割合が他と比べて大きい。これは、⑤八雲地区の５月と⑩枚方地区の８月にイベントが開催されており、イベント開催の有無が河川公園の利用者数の規模に大きく影響していることがわかる(図 2-1, 図 2-2)。

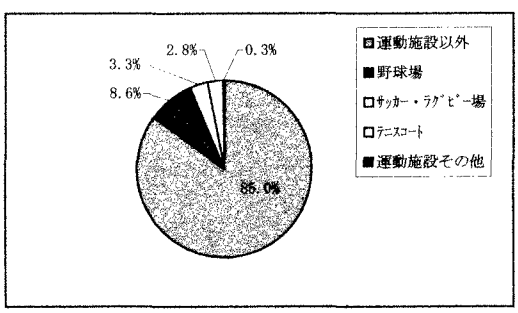


図 2-1　利用者数構成

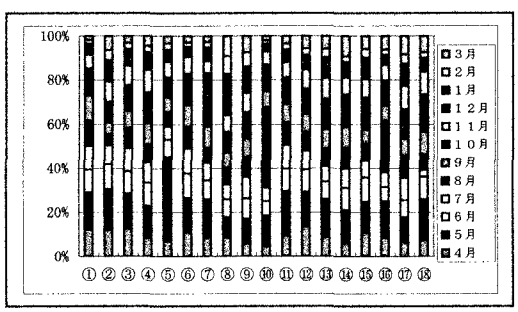


図 2-2　運動施設以外の利用者月別割合

Hidekazu TAKATA, Naofumi MATUSHITA, Kazuyoshi IWASAKI

3．河川敷の利用に影響を与える要因分析

利用に影響を与える（反映する）要因を「広さ（面積・河川敷幅）」、「アクセス（駐車場台数・駅からの距離）」、「便益施設（トイレの数）」、「運動施設（野球場の面数）」、「修景施設（池の有無）」及び「PR（イベントの有無）」として、これを説明変数に、「利用者数」を目的変数として数量化Ⅰ類の分析を行なった。構造式は現状をうまく説明しており(R=0.93)、カテゴリースコアをみると、「トイレの数」、「イベントの有無」、「駐車場台数」、「面積」が利用者数に対して影響力があり、「野球場の面数」、「池の有無」はほとんどないという結果が得られた（図3-1）。

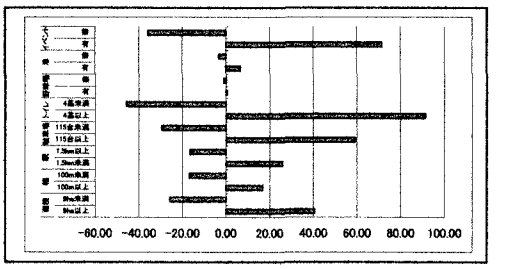


図3-1　カテゴリースコアグラフ

4．利用者の意識特性

3章で得られた要因を多く満たせば利用者も多いという関係が現実に必ずしもみられるわけではなく、こうした個別問題を明らかにすべく、3章で得られた要因（条件）を満たしており利用者が多い枚方地区において利用者への意識調査を行った（調査日：平成12年10月22日，調査数:53名）。河川公園のメリットは、「芝生広場がある」、「開放感がある」、「広い」のような公園の広さがメリットと考えている人が多く、「噴水がある、」「水に親しめる」、「川がある」のような河川公園固有の親水機能についてはメリットと考えている人は少なかった。河川公園のデメリットとしては、「トイレが少ない」といった便益施設の欠如を考えている人が多かった（図4-1，図4-2）。

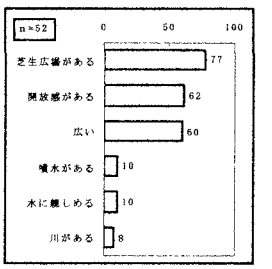


図4-1　メリット

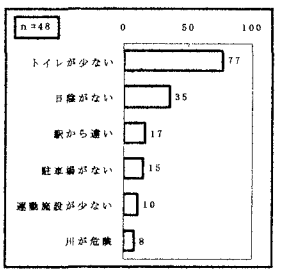


図4-2　デメリット

5．ISM法河川敷レクリエーション空間に対する意識の階層分析

利用者数の増加に影響すると考えられる河川敷レクリエーション空間整備に関する評価項目を5つ設定し、ヒアリング調査からISM法により意識の階層性を分析した（図5-1）。

その結果は、公園管理者と公園利用者の考えが異なっているところは公園の知名度に影響する要因への理解（または解釈）の差である。公園管理者は、他の評価項目に関係なく配布物等で知名度の獲得が可能と考えているが、公園利用者は交通手段を前提としてイベント等を実施する事により知名度が向上すると考えている。しかし、実際に利用者への公園の存在が知らされなければ目的とする快適なレクリエーション空間を提供しているとは言えない。そのためにも、スペース等個別河川敷公園の各種条件の下で効果的とされるイベント開催を意識した整備も重要と考えられる。

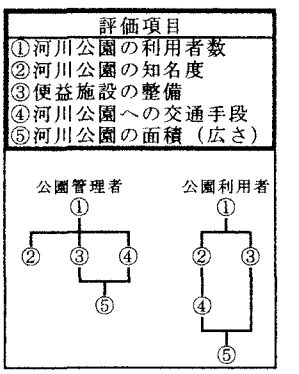


図5-1　ISM法の結果

6．まとめ

本研究で得られた事をまとめると、①河川敷レクリエーション空間は、開放感ある広さが利用者にとって好まれている。②河川敷におけるレクリエーション空間整備は、駐車場やトイレ等の便益施設の整備が重要である。③河川敷レクリエーション空間において利用数を向上させるために個別条件の下でイベント開催を意識した整備も重要であることが明らかになった。今後、河川敷をレクリエーション空間整備していくための課題は、計画の段階から上記の事を踏まえて検討していくことが必要である。

＜謝辞＞　本研究を進めるにあたり、国土交通省近畿地方整備局淀川工事事務所河川公園課の皆様に協力を得ました。この場を借りてお礼を申し上げます。